



## 変化に適応していくチカラ

サッカー日本代表監督を務めるイビツァ・オシム氏は、選手に課すトレーニングが一風変わっていることで知られている。何色ものゼッケンを用いたトレーニングが行われている様子をテレビで御覧になったことのある方も多いのではないだろうか。このユニークなトレーニングの例として、ハーフコートで行う1対1というメニューがある<sup>1)</sup>。

選手をオフェンス側とディフェンス側の2グループに分け、広大なピッチ上で1対1の勝負を行う。通常であれば単に1対1の勝負を繰り返すだけだが、オシム氏は日本人のおよそ常識的な発想には無いことを選手に要求する。もしディフェンスが不利な状況になれば、「1対1」という当初のルールに捕われず、即座にフォローに加わり1対2の状況を作ることを求める。これはオフェンスも同様で、1対2となりオフェンスが不利な状況になればサポートに入り2対2に、更にディフェンスが...と続き、いつの間にかピッチ上は5対5や6対6という状況になる。選手の数はいつまでも増えていきそうだが「これ以上の選手が加わると利用できるスペースがなくなり、効果的なプレーができなくなる」と判断されれば、プレーに有機的に関与できる選手のみ残り、攻守に連動したサッカーが繰り広げられる。

サッカーでは試合前に監督が戦略を練り、これを

ピッチ上の選手が実現する。ひと昔前は3-5-2や4-4-2といったシステム論が声高に叫ばれ、選手にはこの形式を重視してプレーすることが求められた。しかし、実際の試合では、事前の戦略やシステムの型通りに進められることは少なく、むしろ事前の予測とピッチ上の現実との乖離をいかに埋めるかが重要となる。相手チームの戦略やシステムが事前の予想と異なる場合もあるだろうし、肌で感じる相手選手の強さや速さが想像

以上だったということもあるだろう。先のトレーニングのように、必要とあれば既存の枠組を超え、状況に応じたプレーを選択していく適応力が、選手には求められているのである。

コンピュータが自動的に売買を行う「アルゴリズム取引」には、その用途に応じて様々な戦略が用意されているが、更に次の世代のアルゴリズム取引

に求められるのは、マーケットの状況に応じて複数の戦略の中から最適なアルゴリズムを機動的に選択していく適応力と言われている。選手が眼前の情報をもとに次のプレーを選択していくように、コンピュータがマーケットの動向を見定め戦略をダイナミックに動かしていく—そんな光景を目の当たりにする日は意外と遠くないのかもしれない。(上杉 信孝)



1) 木村元彦著『オシムの言葉—フィールドの向こうに人生が見える』集英社